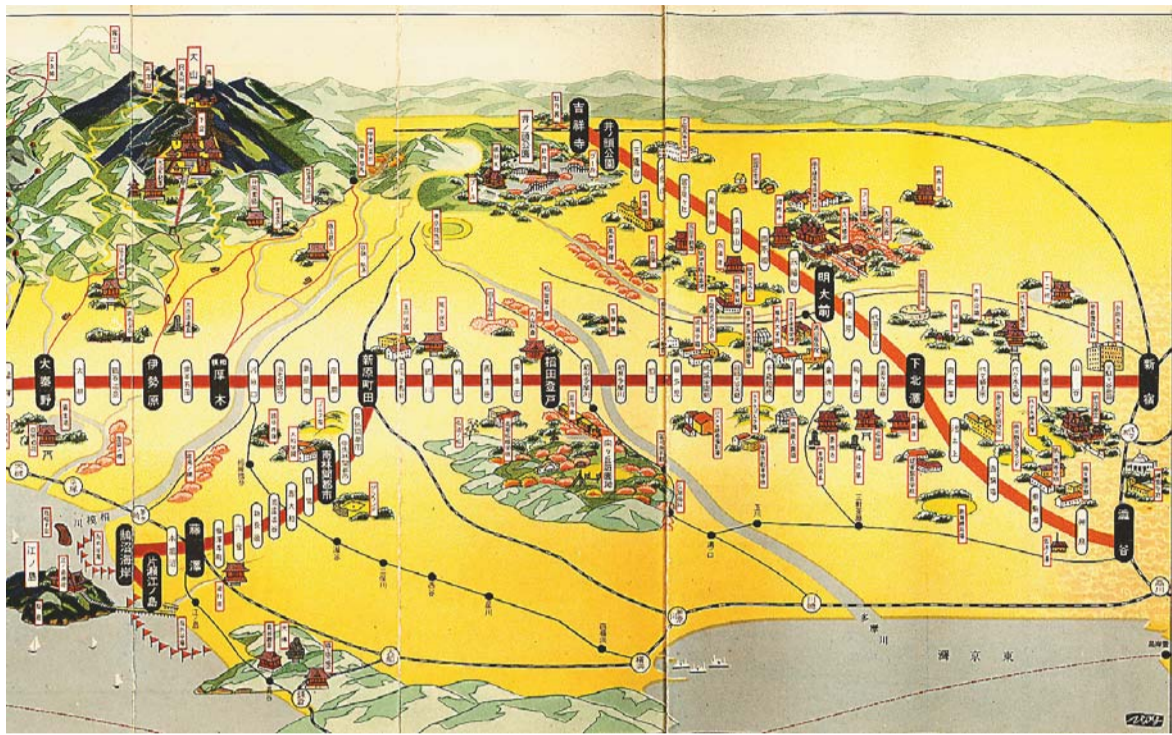


歴史を知れば、見方が変わる

想像力と好奇心で歩いてみよう



▲ 小田急沿線案内図(昭和15~17年ごろ)。この当時は井の頭線も小田急傘下にあった

生田キャンパスに通う学生にとって最も身近な向ヶ丘遊園駅。駅とその周辺の歴史を永江雅和経済学部教授に寄稿していただいた。



経済学部教授 永江 雅和

経済学部教授。一橋大学経済学研究科後期博士課程修了。博士(経済学)。同時代史学会理事。政治経済学・歴史学学会、歴史学研究会などに所属。主な担当科目は「日本経済史」「歴史と経済」ほか。

新生の皆さん、ご入學おめでとうございます。歴史学では、文書史料だけでなく、画像統計、聞き取りなど多様な素材を「史料」として解釈する手法が発達しつつあり、学ごころで、社会や経済活動に対する理解を深めようという側面を持つ学問分野です。また近年の

寄稿

街から学ぶ

ます。ですから本やインターネットはもちろんのタネ、学びのタネは四六時中、あちこちに転がっていると考えざるべきで

す。たとえば現在の街並みから過去の歴史を想起して、そこから現代につながる知恵を還元することも可能でしょう。要は注意力、想像力と好奇心。幸い生田キャンパス周辺は縄文時代の昔から人々が居住していた歴史のある土地ですから、その種の素材には事欠きません。せっかくの通学時間、友人のおしゃべりが途絶えた時には、キャンパス周辺の街並みに思



▲ 開設当初は「稲田登戸駅」だった。当時の南口駅舎とホーム



◀ 昭和2年に小田急小田原線が開通した時から現存する唯一の駅舎。牧舎をイメージさせる中折れ屋根はマンサード・スタイルと呼ばれる

「向ヶ丘遊園」ってどんなところ？

駅舎は歴史的建造物

遊園地へつないだモノレールも

そして専修大学生田向ヶ丘遊園駅について。駅の最寄駅である、駅名はかつてこの地にあった遊園地由来です。

また、そのための駅舎を乗客誘致の目玉である向ヶ丘遊園に建てた、現存する唯一の歴史的建造物です。牧舎のような中折れ屋根はマンサード・スタイルとい

います。ぜひ一度じっくり見学してみてください。

「向ヶ丘遊園」とは昭和2年、小田急小田原線の開業とほぼ同時に、沿線誘致策の一つとして開設された遊園地でした。当初は桜や紅葉を楽しむ

の憩いの場となりました。遊園地の歴史をみてゆくと、近代日本人の余暇行動が近代化のなかで徐々に消費活動に結び付けられ、余暇の提供者が企業(レジャー産業)化していく歴史をたどることになります。閉園の原因は国内の不況や余暇・娯楽の多様化、それにTDL(東京ディズニーランド)のような巨大テーマパークとの競争に敗れたからだとも考えられますが、近隣のよみうりランドは現在でも健闘して営業を続けていますから、そのような説明で十分であるかどうかはわかりません。よみうりランドは存続して、なぜ向ヶ丘遊園が存続できなかったのか。私のゼミには、これを卒論のテーマにした学生もいます。皆さんもぜひ考えてみると楽しいですよ。

跡地の一部は、ばら苑として春と秋に季節限定で公開されていますので、一度足を運んでみてください。

自然公園のような園地では、路面電車が引かれたり、戦後は大型のプールやスケートリンクを常備し、フラワーショーなどのイベントを定期的に行う総合娯楽施設として発展し、平成14年の閉園まで75年間、近郊住民

都内では乗客が多かったものの、多摩川以西の乗客が少なく、苦戦していたと言われています。

そのために駅名を乗客誘致の目玉である向ヶ丘遊園に改めて華やかなイメージを狙ったものと言えそうです。実は向ヶ丘という地名は現在の高津区にあった向ヶ丘村に由来していますから、駅付近の地名とはずれてしまっています。

開業当初の駅前は一面の水田と梨畑が広がっており、途中で梨のもぎ取りをしなが、遊園地までの道が楽しめたと言

います。

現在、小田急小田原線は、沿線誘致策の一つとして開設された遊園地でした。当初は桜や紅葉を楽しむ

の憩いの場となりました。遊園地の歴史をみてゆくと、近代日本人の余暇行動が近代化のなかで徐々に消費活動に結び付けられ、余暇の提供者が企業(レジャー産業)化していく歴史をたどることになります。閉園の原因は国内の不況や余暇・娯楽の多様化、それにTDL(東京ディズニーランド)のような巨大テーマパークとの競争に敗れたからだとも考えられますが、近隣のよみうりランドは現在でも健闘して営業を続けていますから、そのような説明で十分であるかどうかはわかりません。よみうりランドは存続して、なぜ向ヶ丘遊園が存続できなかったのか。私のゼミには、これを卒論のテーマにした学生もいます。皆さんもぜひ考えてみると楽しいですよ。

跡地の一部は、ばら苑として春と秋に季節限定で公開されていますので、一度足を運んでみてください。

自然公園のような園地では、路面電車が引かれたり、戦後は大型のプールやスケートリンクを常備し、フラワーショーなどのイベントを定期的に行う総合娯楽施設として発展し、平成14年の閉園まで75年間、近郊住民

都内では乗客が多かったものの、多摩川以西の乗客が少なく、苦戦していたと言われています。

そのために駅名を乗客誘致の目玉である向ヶ丘遊園に改めて華やかなイメージを狙ったものと言えそうです。実は向ヶ丘という地名は現在の高津区にあった向ヶ丘村に由来していますから、駅付近の地名とはずれてしまっています。



▲ 現在は廃止されてしまったモノレール(昭和45年)

現在、小田急小田原線は、沿線誘致策の一つとして開設された遊園地でした。当初は桜や紅葉を楽しむの憩いの場となりました。遊園地の歴史をみてゆくと、近代日本人の余暇行動が近代化のなかで徐々に消費活動に結び付けられ、余暇の提供者が企業(レジャー産業)化していく歴史をたどることになります。閉園の原因は国内の不況や余暇・娯楽の多様化、それにTDL(東京ディズニーランド)のような巨大テーマパークとの競争に敗れたからだとも考えられますが、近隣のよみうりランドは現在でも健闘して営業を続けていますから、そのような説明で十分であるかどうかはわかりません。よみうりランドは存続して、なぜ向ヶ丘遊園が存続できなかったのか。私のゼミには、これを卒論のテーマにした学生もいます。皆さんもぜひ考えてみると楽しいですよ。



▲ 春と秋に公開される「ばら苑」